

場面	時間	人物(仮)	
1	ミュンスター 2017年8月	Saori	ミュンスターの思い出について、熱い思いを持ちながら語っている <ul style="list-style-type: none"> ・ミュンスター彫刻プロジェクトは、ドイツ北西部の都市・ミュンスターで10年おきに開催されている芸術祭。 ・1977年から始まり、2017年に6回目が開催。 ・2017年に、ミュンスターへ行った。 ・とにかく楽しくて印象に残った。 ・何が楽しかったか？ 時間の感覚、サイクリングの移動、あちこちに彫刻が埋め込まれているという感じ、10年という時間の単位 ・芸術祭について、彫刻(パフォーマンス)という概念について、とにかく色々考えた。
2	HAGISO 2018年4月	Yuuri	落ち着きがあり、しかし好奇心に満ちている <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクトスタディを始めるにあたって、居間シアターと佐藤慎也にもオファーしてみようと思う。 ・【それはなぜだったか？】 ・HAGISOにて会談。 ・ミュンスターが楽しかった。 ・ミュンスターを出発点にスタディをやってみようと思った。 ・【坂本さんがやってみようと思った気持ち】
3	どこでもない	ある日	Aki そう、私たちは行きたいと思ったのです。
4	ミュンスター および 3331 1977年から 2017年まで そして時間 は飛び、 2018年9月	Shinya	ミュンスターを解説・分析したスライドを提示している。冷静に、しかし興味深く(1977~2017年) <ul style="list-style-type: none"> ・最初は、パブリックアートのような彫刻作品だった、その後、場所との関係や街の人たちとの関係が変化していつて、それに伴って「彫刻」はさまざまな拡がりを持ってきたのだろうと改めて思う。 ・いわゆる彫刻的なものはもちろんのこと、場所と一体となった映像インスタレーションだったり、毎回決まった時間に行われるパフォーマンスだったり、現代的な美術の動きが確実に反映されていたように思います。 ・それが10年という準備時間を使って街の中に実現していき、それを街の人たちがさまざまに向き合い、受け入れたり、反発していきながら、また次の10年に向かっていくのだろうな、と。もはや彫刻は、その話し合いのための触媒でしかないようにも見えました。 ・10年おきの視点で芸術祭をみていく面白さがありました。 時間が飛び、2018年 <ul style="list-style-type: none"> ・美術ジャーナリストの村田真さんと呼んで話を聞く ・傾向と対策は役に立たない
5	ほんやりとした どこかの 時間(実時間 としては 2018年10 月)	Satoko (間接的に鶴 見俊輔先生)	ほんやりとした気持ちを抱えつつ、ネガティブではない、前向きな崩れかきがある <ul style="list-style-type: none"> ・村田さんが来たのち、このスタディはどこへ向かえばよいのか、ひとつの分岐点にあった。 ・ある日、鶴見俊輔botがつぶやいた。 「ほんやりした思想の領域、ほんやりしたコミュニケーションの領域があり、それは、そのほんやりしていることがするどく当事者によって自覚されているかぎり、科学においても、芸術においても、宗教においても、政治においても、日常の生活の領域においても、すぐれた創造のきっかけとなりうる」。 ・このほんやりつぶやきをもとに、ほんやりとしたことについて話してみることにした。 ・得意なことをそれぞれが話すのではなく、何かに対してほんやりと思うことを話す日。 ・最後に、「彫刻」というお題が引かれた。裸像の話、イルカの像の話、残る／残らない話、やはりほんやりとした話の中で、ちょうどサンパチヤイト撤去の記事を『美術手帖』に書いた小田原のどかさんに行き着いた。 ・次のゲストは小田原のどかさんに決まったのであった。
6	小田原さんとの 出会い	2018年11月	Miho 小田原のどかさんのレクチャーについて、熱い思いを持ちながら語っている <ul style="list-style-type: none"> ・小田原さんと呼んで、彫刻にまつわる様々なトピックでレクチャーをしてもらった。 ・【全ては語りきれない。何が面白く、どんなところが印象に残ったか、個人の気持ちを語る】 ・私たちは生まれたての赤子のようなくらい、彫刻については何も知らない。 ・レクチャーを経て、新たな興味生まれた。それはまさに「彫刻」「スカルプチャー」について。彫刻面白い、彫刻とは一体何なのだろうか。 ・そして日本の彫刻史に詳しい小田原さんの話を聞けば聞くほど、西洋(ミュンスター含む)の彫刻の歴史と受容のされ方と、日本のそれとは全く違うということがわかった。 ・東京で、私たちの彫刻へのまなざしを何か試しつつ上で、引き続きミュンスターへの接続を考えたいと思った。
東京(フィクション)	1897年~ 2017年 そして2018 年 見通しとして は2027年	(ト書き)	スタディは、ミュンスターというひとつの対象から、2つの興味を持つことになった。 ミュンスター、そして彫刻というものの自体への興味。例えるならば、母から二つの子供が生まれたのである。 ひとつは、彫刻という概念とその拡張について。彫刻とパフォーマンスへの興味。 そしてもうひとつは、ミュンスターに対して東京、の彫刻やパブリックアートについて(そこには芸術祭についても含まれる)。 この二つをどちらも殺さず、生かしながら、次の段階へ進もうと思う。 さしあたって、双子のうちのひとつ、「東京の彫刻」について考えよう。東京の彫刻をフィールドワークしてみたい。小田原さんとの出会いを経て、そんな気持ちが生まれていた。 そんなある日、慎也さんが閃いた。「『東京彫刻計画』ってのはどう？」 「東京藝術大学彫刻科の前身となる東京美術学校が開校した1887年から2027年までの10年ごとに、『東京彫刻計画』というプロジェクトが行なわれている」 ミュンスターのように、10年ごとという時間で東京の彫刻を見てゆく、『東京彫刻計画』(フィクション)が始まったのである。
7	皇居	2018年	Syoko 年の瀬。小雨が降るなか、皇居へ集合した。 1907年設置の子爵品川弥二郎像の前から、皇居をぐるりと回り、国際フォーラムまで歩く。 <ul style="list-style-type: none"> ・芋づつ式に、彫刻に出会う ・裸像の連発 ・「移住」からの「自由の群像」からの「平和の群像」という一連の流れ ・楠木正成像のライトアップに感動 ・有楽町のイルミネーションとアート ・【青木さんの視点から思ったこと、興味深かったこと】
8	上野	2018年	Mamiya 正月が明けてしばらく。冬晴れの中、上野西郷隆盛前へ集合した。 1897年(第2回玉作品)の西郷隆盛像から、上野公園~東京藝術大学を経て御茶ノ水に移動し、水道橋方面へ <ul style="list-style-type: none"> ・偉人像、そしてロダン ・都美 抽象へ M君までの距離 ・水道橋 本郷給水所公園 ・【マミヤさんの視点から思ったこと、興味深かったこと】
9	台場	2018年	Maiho 『東京彫刻計画』の地図を出す 地図の解説 寒波の1月末、湾岸エリアへ向かった。新橋駅前の鉄道唱歌碑から台場、そして田町方面へと、臨海マンションに立つ作品たちを見る。 <ul style="list-style-type: none"> ・等身大の人物像や裸像像がない ・エリアによって若干置かれているものの傾向が違う(上野偉人、丸の内コンセプトなど) ・【マイホさんの視点から思ったこと、興味深かったこと】 『東京彫刻計画』の分析一覧
10	パズル浅草	現在	(まどめ)(未 定) 期待そして、観客への興味を惹き立てるような終幕 <ul style="list-style-type: none"> ・東京でもミュンスターのようなことが追体験できる ・しかし、東京は都市の中に、普段は見えないもののような感じで、彫刻が存在している ・(=ミュンスター、街なかにも馴染み置かれ、芸術祭の時期にいつそう輝く彫刻たち) ・東京彫刻計画は、彫刻を頼りに都市を横移動することで、普段は見えてこない面を体験することができるのではないだろうか(しかし真の面白さは実際に行ってみて、東京を移動し、彫刻と対峙することにある！) ・一方で、双子の片割れ、パフォーマンスと彫刻という興味も持続している ・『東京彫刻計画』の調査がこれから作るパフォーマンスに影響を与えるかもしれない、パフォーマンスが『東京彫刻計画』に入り込んでいくかもしれない ・このスタディは必ずしも一つの答えを出していない、それぞれの参加者の視点から、彫刻に興味をもち、媒介として、それぞれが思考しているのである ・可能性は無限大。刮目せよ！ 旅はまだ始まったばかりなのである。
11	東京/ミュンスター	未来	(To be continued)